

パウロに対する暗殺計画

ユダヤ最高法院の前で自らの回心の出来事を語るパウロの弁明は（ルカは詳しく書いていないが）非常に熱烈なものであったろうと私は想像する。このパウロ回心の体験の証しに、ファリサイ派議員たちは、ひよっとすると本当である可能性があることを強く主張したのに対し、サドカイ派議員たちはこれを真向こうから否定した。

そこで激しい論争となり、収集がつかなくなった。そこでパウロの身の危険を感じた千人隊長は、兵士たちに降りて行ってパウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵営に連れて行くように命じた（10節）。

事態は緊迫の度を増して行った（12～15節）。熱狂的なユダヤ民族主義者の刺客団によるパウロ殺害計画がひそかに、そして周到に立てられ、それが実行に移されようとしていた。もし、ここに神の不思議な介入がなかったらパウロの生涯とその働きはエルサレムで終わっていたことであろう。

しかし、ここで不思議なことが起こる。パウロの甥が、たまたまその暗殺計画を耳にした（16節）。パウロの姉妹の子供とある。この「甥」についても、パウロの姉妹についても、私たちは何も知らない。恐らくパウロの身内の者の中に、議会と関わりを持つ人がいたのかもしれない。

この甥が、たまたま、待ち伏せのうわさを耳にした。人間の目には偶然としか言いようがない。しかし、この偶然と思われることさえ、神のご支配の下にあることを、ルカは強調する。

私たちの人生にも色々なことが起る。不思議なことが起る。そのような思いがけない出来事に直面したとき、私たちは偶然の出来事として片付けてしまう。しかし、神のご支配のもとには偶然ということはない。事実、後になって、偶然と思っていた出来事の背後にも、不思議な神の導きがあったことを知ってオドロクようなことが多い。信仰生活とは、このような「驚きの連続」である。

パウロ暗殺計画を知ったこの青年はパウロの所に急ぐ。パウロはこの青年を千人隊長のところに送る。事の重大さを知った千人隊長は、これ以上パウロをエルサレムに留めることは危険であり、エルサレムでは公正な裁判が不可能であると判断して、彼をローマ総督府のあるカイサリアに送ることを決心した。歩兵200名、騎兵70名、補助兵200名、総勢470名の重装備の護衛隊に守られてパウロはカイサリアに送られて行く。

考えて見よ。ローマの守備隊長クアウディウス・リシアは、これ以上問題をこじらせてはいけない、という現場の政治的判断で、部下を動員してパウロをカイサリアの総督府に送った。しかし、神には別の計画があった。神は福音の前進のために、この重装備のローマの軍隊を用いてご自身の僕パウロを保護し、危険なエルサレムから、ローマ帝国のユダヤにおける地方権力の中核であるカイサリアに送られたのである。

このカイサリアで、パウロは二年間捕囚の生活を余儀なくされるが、それは決して偶然ではなく、その間に、通常の方法では到底起こりえなかったであろう福音宣教の機会、すなわち、ローマの総督フェリクス、その後任のフェストゥスとその高官たち、ユダヤ人の王アグリッパとその要人たち、更にはローマ軍人たちにも福音を伝えていく驚くべき機会となるのである。そこにもまた不思議な神の導きを見るのである。